
A.S

オーレリア解放同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・S

【コード】

N9550Z

【作者名】

オーレリア解放同盟

【あらすじ】

ミラージュプログラム 略称MP

もともと仮想世界で軍事訓練をするために作られた機械はエンターテイメント機として民間用に販売されることになった。

値段が値段であり普及しなかったが、そこに「オーレリア・ストーリー」と呼ばれる体感型MMOARPGが販売され瞬く間に人気が出る。

これは、このゲームの中に強制的に閉じ込められた人々の物語である。

プロローグ

「ふっ!!」

シユンと風を切る音。ブシャツと身体に飛び散る返り血。

目の前に口を開けてだらしなく血を吐いている男の腹は俺の腕が貫通している。

そしてドサツと倒れる目の前の男。もう既にそれは死体扱いだ。本来プレイヤーに現れている生アイコンから死アイコンへと変わる。

「あ、ありがとうございます」

ひざ丈まである黒いロングコートに腕には赤色の防具を身につけている少年の隣にはドレスを着た少女が立ちつくす。

「ん？護衛の仕事を頼んだのはそっちだろう？俺はそれに答えているだけだ。お礼を言われる筋合いはない。その辺の対応は既に金で済まされているからな」

「でも……」

「さあ、さっさと行きましょう。あなたの帰りを待っている人たちがいるのでしよう？」

そう言つと俺は前へと進む。

「は、はい……」

俺がMPと呼ばれる機械と世界を覆う魔法粒子によって作られた世界に来て2年と3カ月がたつ。

現実世界がどうなっているのかは分からない。

だが、俺は帰れる見込みのない世界には用は無い。もうここで生きることを決めた。

この、何でもありなゲームの世界に

STAGE 1：後の祭り

ミラージュプログラム。通称MPが出来たのはつい最近だ。

蜃気楼

このシャンバラと呼ばれる地球と酷似した世界には1万と1千年前に起こった大戦争で魔法粒子、略称MET^{メット}と呼ばれる粒子に覆われるようになった。

昔は攻撃、治癒、防御、精霊化等の様々な魔法を行使するために。

現在は自動車、携帯、パソコンなど、様々な電子機器を動かすのに必要な粒子である。

蜃気楼とは大気中のMETが地上や水上の物体として一時的に具現化される現象。大気MET現象と呼ばれる。

ミラージュとは今となっては使えない魔法の呪文で蜃気楼を意味する。

ミラージュプログラムとは、蜃気楼と呼ばれるこの具現化現象を人間の手で強制的に起こさせ、今いる空間とは別に空間を作りそこで暴れまくって軍事訓練を行うために作られたものである。

だが、つい最近ゲーム技術が大幅に向上し、ついには民間用MPが発売されるようになった。

子供たちは体感型ゲームができるとして飛びついたがさすがに虫がよすぎると言ったところか？子供たちが望むようなゲームはできな

かった。

そこで、売上不調の民間用MP用ソフトとして世界一の軍事国家日本の軍事産業を担う世界最大の売上高を誇る企業高須ホールディングスによる10億を投入した一大プロジェクト。

1千年以上前の世界を元にして作られたMMOARPG「Aura
レリシア ストーリー LisaStory」
通称A・Sが発売された。

値段は3万5千とそこらの携帯ゲーム機、いや、家庭用据え置きゲーム機とさほど変わらない値段だったが2日限定の体験版により売り上げはあれだけの高価格なのにもかかわらず発売1週間で50万本を売り上げた。

だが、これが発売した当初はまさか、俺がこんなゲームに閉じ込められるなどと誰が想像しただろうか？

始まりは俺の友達が原因だった。

「お願いだ!!」

「は？」

「このとおり。お金は2万5千俺が出す。だからこのソフト買ってくれ」

俺は一番の親友である志太川健介 しだがわけんすけ。おっと、俺の名前が遅れたな。
あかすみりょうが 朱澄凌雅。年齢は二人とも16歳だ。

「今日は部活もなく非凡な日だと思っただらゲームをして暇をつぶせと」

「だってさ、俺らのパーティに近接戦闘してくれる前衛がないんだ」

「自分でやれ。無理だつて。おれ狙撃手だもん」

意味解らん。取りあえずこいつは先程説明した「Auralis is a Story」略称A・Sというゲームをやってほしいというのだ。

彼の言い分はこうだ。元々軍用として作られたMP。ゲームシステムはそれと同様に、現実世界でのステータスがゲームでのステータスと比例する。つまり、現実世界で力が強かったり足が速かったりするとA・S内でも力が強かったり足が速かったりする。

更に言えばゲームを構成する上でモンスターを倒したり、やはりアクションRPGなのでそれなりの事が出来ないつまらないということ、現実世界よりもステータスが3倍になるという設定だ。

アクションゲームなのにジャンプしても高さが現実世界と一緒にではつまらないだろう？

だが、考えてみよう。本来握力が30の人と70の人がこのゲームをしたら90と210になる。

確かに割合は変わらない。だが、その差は明らかに開いている。元々40kgの差がいつのまにか120になっている。

と言うことはゲームを進めて行く上で現実世界で運動ができるやつ

や筋力が強い奴の方が有利になるのだ。

攻撃のモーションなどは基本プログラムが完全にサポートしてくれるAutoモードと半分サポートのhalfモード。完全に自分で動かすselfモードの三つに分かれる。Autoやhalfの場合は装備する武器系列独自の能力を習得する事が出来る。アヒリテイ

だが、元々剣道や武道をやっていた人たちの技術に比べればチャッチイものである。

俺は小学生時代に合気道をしていた父に合気道を教えられ、剣術や柔道をやらされた。

中学に入ってから別なスポーツがしたいというが、球技はからっきしダメで出来るスポーツが陸上ぐらいしかなく、仕方なく流れで入ったのが功をなした。

中三では全国大会に進み中学生で100m10秒台という記録をだした。

高一の今では1年なのに県で1位である。

だからこいつは俺にゲームを薦めたのだろう。

「仕方ない。親の稽古用として買った民間型MPがあるから、買うよ」

「ホントか！？嘘じゃないよな？」

「嘘は突いていない」

「ひゃっほーい」

この時。友人の言葉を聞いた俺が間違いだっただとは、後の祭りである。

STAGE 2：ロケイン

「成程」

家に帰ってすぐさまゲームを始めると、俺の部屋は真っ白な空間となり俺の横に四角い画面が表示された。

名前を入力してください。そこらのゲームとさほど変わりはない。

「えーと・・・」

名前名前・・・ “あかすみ りょうが” だから、あかすみでアス・・・アスガにしよう。

他の手続きは適当に済まして俺はゲームを始める。

まず初めに選ぶのが種族である。

種族と言っても大まかに分けると人間か獣人族であるが、さらに細かく分けると獣人族の下に狼獣人や猫獣人等の動物種に分けられる。

俺は取りあえずすぐさまに人間を選んだ。さすがに、俺に猫耳や、狼の耳は合わないだろう。

次に選ぶのが大陸。

千年前は今と違って大陸が少し違う。数世紀前に起こったシャンバラ規模の大災害によりシャンバラの地形は変わり世界は5つの大陸にわかれた。

だが、この世界ではまだ大陸が3つだった時代。世界の北西に位置するオーレリシア大陸。今で言うヨーロッパだ。東に位置するアシリス大陸は今で言うなればアジア。南西に位置するアーフカリア大陸。名前からしてこの大陸はアフリカ大陸である。この3つだ。

この3つの大陸の中から一つを選んで、また、その大陸の国家を選ぶ。そこでゲームは開始だ。

健介曰く、ギルドと呼ばれる組合に加盟した方がいいと。そこからソルジャーギルドで名を馳せれば軍に士官できるし、商工業ギルドに加盟すると企業を立て、商売をすることも可能。何事も基礎から固めなければならぬということだ。

更にメンバーを集めてある地域で独立するなど、システム的には可能らしい。

ようするに、何でもありの世界と言うわけだ。

まあ、一人旅や、誰かとパーティ組んで冒険するのもある意味このゲームの醍醐味かもしれないが……

健介に言われたとおりスペインの原型、オーレリシア大陸のイスパニア帝国。

「初期設定完了。これから、あなたをオーレリシア・ストーリーの世界へお導きします。現実世界では味わえない感覚をどうぞご堪能ください」

無機質な声によるナレーション。この声が俺を悪夢へと導いた。

「GAME START」

真っ白な空間はだんだんと濃くなっていき、あらゆる世界が構成されていく。

「うっ！！」

眩暈とも立ちくらみとも言えない感覚に襲われ、まばゆい光に再び包まれると、俺は地上に降り立っていた。

「こ、ここが……オーレリシア・ストーリー」

俺が選んだのはイスパニア帝国。降り立ったのは首都であるマドリッド。

時代が時代だけに当時と同じようなレンガの建物や、首都の中心マドリッド広場には大きな噴水がつくられている。

「おお、そこにいたか」

「ん？」

突然聞き覚えのある声に反応すると、予想通りのお相手がいた。

「健介か」

「探したぜ。まったく。お前のステータス見ていいか？」

「いいけど、見せ方知らないぞ？」

「視線を相手に合わせると相手の頭上にカーソルが出る。それに合わせて視界右下のメニューボタンを押すとメニューの中にotherって出てくるからそれを見ればいいんだ」

「成程」

俺はそう答えると視界右側にメニューボタンがあることに気づく。

「お前のステータスは・・・武器何も装備してないじゃねえか」

「今ロゲインしたばかりだ」

「まったく。基本的な装備はアイテム欄に入っているから気に入った装備つけとけよ。ほとんどの武器系統入ってるから。なにになに・・・なんだこのステータス!？」

俺のステータスを見た瞬間健介は驚愕の顔をした。何がそんなにおかしいんだ？

「射撃と魔法以外全部俺に勝ってる・・・しかもこの差は何なんだ？」

「現実世界と比例するらしいからな。こんなもんだろ？」

そう言っつて俺は健介のステータスと俺のステータスを見比べる。

・・・詳しくはプライバシーと今後のプレイヤーのために言わないが、平均して全てにおいて健介のステータスの3倍ある。

しかし俺はレベル1。健介はレベル12。なんだろうな・・・この差

「やはりお前を連れてきてよかった。レベル1でこれだ。相当前線で使える。しかし・・・普通に考えるとお前のステータスからするとレベル40はあってもいいぐらいだぞ」

「そっなのか？」

と言われても俺にはピンとこない。このゲームにおいてレベル40はどのくらいなのか。

「レベル40ってどのくらいだ？」

「今ゲームを一番早く始めて、課金連中ならばレベル50到達しているかどうかだ」

そう考えると俺のステータスがよほどすごいということが解る。

「これであいつらのお望み通りにしてやるぜ」

「話がついていけないぜ・・・」

何の話だがさっぱりの朱澄凌雅ことアスガはため息をついた。

高須ホールディングス

「何処からの攻撃だ!!」

高須ホールディングス代表取締役の高須隆二は怒声を揚げる。

「お、おそらくは中華連邦共和国からの攻撃かと・・・」

「ちっ、チャイニーズが！！そんなにMPのデータが欲しいか」

MP・・・ミラージユププログラムの略だ。

民間用のMPは相当に性能がダウンされているモンキーモデルな為、中華連邦共和国が国を上げてコピーしても仮想空間での軍事訓練ができないのだ。

そもそも民間用のMPはソフトがない限り仮想空間をつくることができず、日本の軍事訓練で使われているような仮想空間を作り出すにはMP自体にかなりのCPUとグラフィックボードが必要とされ、世界中の国家が精力を出しても開発には4半世紀以上かかると言われている。

ならばそれを開発した日本企業高須ホールディングスへクラッキングを行いデータを取れば開発は早まるだろう。そう考える輩が出てくるのだ。

特にお隣の中華連邦共和国。

「だめです。侵入を防げません」

「チツ仕方がない。データのバックアップは取れているから、社内の電源を全面カット。非常電源も落とせ」

「そ、そんなことしたら・・・A・S管理システムがダウンし70万人のユーザーが・・・」

「・・・それも仕方あるまい。わが社の機密情報が奪われるよりも
ました。何も理論的に彼らは死ぬわけではない」

MPによって作られた仮想世界。A・Sを管理するシステムにより
ログイン、ログアウト、セーブ、ロードができる。略称A・S・M・
S(Aurallisia Story Manager System)これこそが、仮想世界と現実世界を繋げる唯一の存在。

そしてそのデータが高須ホールディングス本社に作られているのだ。

理論的にはA・S・M・Sが一度でもダウンすると再びA・S・M・
Sを仮想世界に介入させる事は天文学的な確率で可能だが、まあ一
言で言えば不可能だ。だが、仮想世界は作られた状態で維持される
ため、死ぬことはない。その世界で永遠と生き続けることになる。

死ぬとするならば自殺か、もしくは誰かに殺される。HPがゼロに
なるからだ。

HPがゼロになると管理システムが作動しセーブポイントからやり
直しになる。だが、このセーブも管理システムがあるからこそであ
る。管理システムがダウンし、仮想世界に介入不可となればセーブ
は不可能となりHPがゼロになったらやり直すことなど不可能
となり、結果的に仮想世界の中でバグが生じ延々とデータとしてさ
迷い続けることとなるだろう。

つまり無に帰ることだ。

「し、しかし・・・マスコミが黙って見過ごす筈が・・・」

「私設部隊で黙らせる！！この事は黙認だ。そしてA・Sの販売を終了しろ。民間用MPもだ。あらゆる小売店からA・Sを徴収し、ユーザーの親族にはデーモンデリーターによる悪魔化という処理もしておけ」

悪魔化・・・まだ人類が魔法を使えた時の話。

人々はMETを使い魔法を行使していた。だが、そのMETを体に大量に浴びるとモンスター化する。

そしてそれは今でも変わらない。モンスター化のことを今では悪魔化と呼び、それを処理する人々をデーモンデリーターと呼ぶ。

高須ホールディングスは悪魔処理という名でユーザーを死んだことにさせるのだ。

「はっ！！！」

「ユーザーよ・・・仮想世界で頑張りたまえ」

STAGE 3：ログアウト不能

「どうした？」

隣で歩く健介がメニュー画面を開いては閉じと意味のわからない行動を繰り返していた。

「いや、お前もメニュー画面開いてくれ」

「おう」

そう言うと俺は視界右下のボタンに触れメニュー画面を開く。

「メニュー画面を開いたがどうしたのだ？」

「セーブボタンがない」

「………ほんとだ」

「更に言わせてもらおう。ログイン・ログアウトボタンがない」

「………どういうことだ？」

俺は伊案の現状を整理し始める。俺の視界の中には、アイテムとステータス、スキル、装備、魔法と書かれたボタンが見える。だが、その中に本来ある筈のセーブ、ログイン、ログアウトのボタンがないのだ。

では、それらが無くなったらどうなるかということを考えてみよう。

彼らにとってはどうでもいいことかもしれない。だが、完全に趣味でやっている者。家族がいる者。仕事がある者。色々いる。そのよ
うな人々にとってはかなり大迷惑なことだ

「おいおい、他の連中もそうだぜ？」

「まずい状況じゃねえの？」

俺と健介は全く同じ意見となった。

答えは会えて口に出さない。それは周りの人々がさらなるパニック
を起こしかねないからである。

単刀直入に言おう。この仮想世界から脱出できない。

「……どうする？俺はこのゲームを始めてまだ2時間もたつて
いないぞ？」

「対策もしておきたいところだが……どうすれば……」

もし本当に此処から出られないとなると何か対策をして生きながら
えなければいけない。

しかし、その対策が解らないのだ。

さて、どうするか……

俺達は対策を考えながらも、宿泊施設へ泊って今日はログアウトで
きずに寝着いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9550z/>

A.S

2011年12月30日01時52分発行